

授業科目 (科目ID)	心理測定法	担当教員  (実務経験)	阿部 純一  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 工学士、文学部修士取得後、研究・教育歴40年以上。道内大学にて名誉教授職に就く		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に必要な心理測定技法、尺度構成技法、調査技法、データ処理技法などを学ぶ。				
到達目標	諸技法を習得するとともに、それらの基礎にある、人間の心理や行動を客観的に把握するための基本的姿勢を理解する。				
テキスト・参考図書等	配布資料 および 参考図書: ヒルガードの心理学・第16版 著者名:ホークセマ他 発行所:金剛出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70%	定期試験と小テストを合わせて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	30%			
	提出物	%			
	その他	%			
履修上の留意事項	心理学とは、人間の心理と行動のメカニズムを解明し、合理的に説明しようとする科学である。そこでは客観的な方法論が必要とされることをよく理解する。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	精神物理学(心理物理学)的測定法	閾値の測定、恒常誤差		
	2	精神物理学(心理物理学)的測定法	調整法		
	3	精神物理学(心理物理学)的測定法	極限法		
	4	精神物理学(心理物理学)的測定法	恒常法		
	5	信号検出理論	信号検出理論		
	6	尺度構成法	尺度水準		
	7	尺度構成法	評定法、順位法、一対比較法		
	8	尺度構成法	比率尺度構成法、多次元尺度構成法		
	9	調査法	質問紙法		
	10	調査法	サンプリング		
	11	データ処理技法	データ解析法		
	12	テスト理論	標準化、妥当性、信頼性		
	13	テスト理論	因子分析		
	14	心理測定法の復習とまとめ	復習と模擬テスト		
15	心理測定法の復習とまとめ	復習とまとめ			

	聴覚心理学	担当教員  (実務経験)	阿部 純一  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 工学士、文学部修士取得後、研究・教育歴40年以上。道内大学にて名誉教授職に就く		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	人間の“聞こえ”のメカニズムを学ぶ。また、聴覚特性を理解する。				
到達目標	聞こえに対応する音の物理的特徴を知る。人間の聴覚特性を知る。				
テキスト・参考図書等	配布資料 および 参考図書：言語聴覚士のための音響学 著者名：今泉敏 発行所：医歯薬出版 参考図書：言語聴覚士の音響学入門 著者名：吉田友敬 発行所：海文堂出版 参考図書：音響聴覚心理学 著者名：大串健吾 発行所：誠信書房				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70%	定期試験と小テストを合わせて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	30%			
	提出物	%			
	その他	%			
履修上の留意事項	物理的な音響があるから聞こえるのではない。聞く・聞こえるという人間の内的メカニズムがあるから聞こえる。そのメカニズムを理解する。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	音と聴覚システム(聴覚系)	音の物理学的記述		
	2	音と聴覚システム(聴覚系)	聴覚系の構造		
	3	音と聴覚システム(聴覚系)	聴覚神経系の反応		
	4	音の心理物理学	音の物理的特徴とそれに対応する心理的屬性		
	5	音の心理物理学	音の大きさ(ラウドネス)		
	6	音の心理物理学	音の高さ(ピッチ)		
	7	音の心理物理学	音色、音の時間的特徴とその感覚・知覚		
	8	聴覚の周波数特性	絶対閾・感覚閾		
	9	聴覚の周波数特性	弁別閾		
	10	聴覚の周波数特性	可聴範囲		
	11	聴覚の周波数特性	周波数特性、絶対判断と相対判断		
	12	マスキング現象	臨界帯域、聴覚フィルター		
	13	マスキング現象	同時マスキング、継時マスキング、中枢性マスキング		
	14	両耳聴	両耳の心理的効果、空間感覚、音源定位、カクテルパーティー効果		
15	環境と聴覚	聴覚順応、聴覚疲労、環境騒音			

授業科目 (科目ID)	言語聴覚障害学概論Ⅱ		担当教員  (実務経験)	佐々木 勇輝  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年勤務		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	①リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を理解する。②臨床実習、国家試験に向けた準備をする。					
到達目標	①病院等の組織ならびにリハビリテーションチームの一員としての運営・管理を学ぶ。②国試問題、臨床実習への取組み方を学ぶ。					
テキスト・参考図書等	特に指定しない					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	%	提出物(模試問題・グループワークによって作成された解説等)で評価を行う			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	100%				
その他	%					
履修上の留意事項	国家試験および臨床実習に向けた重要な科目のため、意欲をもって参加すること。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	チームアプローチとは	PT・OT・MSW・Nrs			
	2	情報管理	個人情報保護法について			
	3	診療報酬等	医療報酬、介護報酬、指示箋とリハ記録			
	4	国家試験対策	グループワークにて解説を作成し発表する(ジグソー法)			
	5	国家試験対策	グループワークにて解説を作成し発表する(ジグソー法)			
	6	臨床実習準備	・評価とは ・目の前の患者から何を観察したらよいのか、着眼点を学ぶ			
	7	臨床実習準備	・デイリー・レポートとは ・患者を評価し、結果・考察を文章にする技術を学ぶ			
	8	国家試験対策	模試問題実施			
	9	国家試験対策	模試問題実施			
	10	リスクマネージメント	片麻痺患者のADLについて 移乗、トランスファーなど 吸引(PT)			
	11	リスクマネージメント	片麻痺患者のADLについて 移乗、トランスファーなど 吸引(PT)			
	12	バイタルサインとは	バイタルサインの意義を学ぶ。測定方法(血圧、脈拍、呼吸)(Ns、EMT)			
	13	バイタルサインとは	バイタルサインの意義を学ぶ。測定方法(血圧、脈拍、呼吸)(Ns、EMT)			
	14	臨床実習準備	実習の手引きの説明			
15	臨床実習準備	実習の手引きの説明				



授業科目 (科目ID)	言語聴覚障害診断学 I		担当教員  (実務経験)	松山 大輔  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に関わるそれぞれの分野の評価、援助技術について学ぶ。					
到達目標	言語聴覚障害学について学習し、評価の方法や援助技術について確認し、実施できる。 また、それらを報告し、系統立てて言語聴覚障害について考えることができる。					
テキスト・ 参考図書等	(教)診断力UP! 動画と音声で学ぶ 失語症の症状とアプローチ (参)図解 やさしくわかる言語聴覚障害 著者名:小嶋智幸 発行所:ナツメ社					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	60%	実技試験、レポートで総合的に評価を行う。			
	レポート	40%				
	小テスト	0%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席せず、予習復習をすること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	2	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	3	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	4	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	5	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	6	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	7	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	8	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	9	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	10	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	11	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	12	成人系言語聴覚診断	運動障害性構音障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	13	成人系言語聴覚診断	運動障害性構音障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法			
	14	小児系言語聴覚診断	小児分野の知的発達及び言語発達の評価と結果の解釈、実際の支援方法			
15	小児系言語聴覚診断	小児分野の知的発達及び言語発達の評価と結果の解釈、実際の支援方法				



授業科目 (科目ID)	失語症Ⅱ  22g216		担当教員  (実務経験)	教 貴代美  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 市内病院にて言語聴覚士として34年以上勤務	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30時間
授業目的	失語症の言語治療は言語・コミュニケーションの問題点の把握から始まる。単に検査を実施するだけでなく、その結果を意味付けすることが重要である。この授業ではコミュニケーション能力、予後予測のをするために、原因、発生メカニズムを検討し検査や面接で収集した情報を分析・統合する方法を学ぶ。				
到達目標	・代表的な失語症検査の解釈について学ぶ。・評価サマリーの作成の仕方について学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(教)失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版 (教)なるほど！失語症の評価と治療 金原出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験と提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	%			
	提出物	20%			
	その他	%			
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	復習	失語症の症状		
	2	復習	失語症の検査		
	3	評価・診断の原則	ICFに則った失語症のみかた		
	4	情報収集	初回面接、言語面・関連職種からの情報収集、病歴の取り方、神経学的診察の手法、画像診断、その他の検査		
	5	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	聞く側面		
	6	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	話す側面		
	7	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	読む側面		
	8	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	書く側面		
	9	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	数的処理について		
	10	標準失語症検査(SLTA)の統合と解釈について	全体を通して		
	11	問題点の抽出	収集した情報、検査結果より問題点を抽出する		
	12	目標設定と訓練計画	将来を見通して目標と達成するステップを考える		
	13	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出しサマリーにまとめる		
	14	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出してサマリーにまとめる。		
15	鑑別診断	関連する障害との鑑別診断について			

授業科目 (科目ID)	失語症Ⅲ		担当教員  (実務経験)	眞 貴代美  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内の病院で34年以上言語聴覚士として勤務	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30時間
授業目的	失語症の評価結果に基づいて言語症状を診断し、治療・援助を行なうプロセスと手法を学ぶ。				
到達目標	・基本的な訓練プランの立て方を学ぶ。・病期別の訓練の考え方を学ぶ。・個々の障害に焦点を当てた訓練を考えられる。 ・社会復帰における言語聴覚士の役割を理解する				
テキスト・参考図書等	(教)失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100%	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	%			
	提出物	%			
	その他	%			
履修上の留意事項	予習・復習にも力を入れて学習すること。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	2	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	3	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	4	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	5	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	6	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	7	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	8	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	9	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	10	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	11	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	12	症例検討	症例について		
	13	症例検討	症例について		
	14	症例検討	症例について		
15	小児失語	小児失語症の原因・症状・評価・治療・援助			

授業科目 (科目ID)	失語症演習Ⅱ		担当教員  (実務経験)	松山 大輔  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚療法の対象である失語症について、失語症検査・掘り下げ検査・評価技能を実技的に学ぶ					
到達目標	各種失語症検査を実施できる					
テキスト・ 参考図書等	特に指定しない					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	60%	試験(筆記40:実技20)、提出物から評価する			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	40%				
その他	%					
履修上の 留意事項	SLTA同様、失語症患者に対する重要な評価となる。 実習に向け、講義時間だけでは習得に十分な時間がとれないので、各自空き時間に積極的に検査練習を行うこと。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	失語症の評価	WAB失語症検査とは			
	2	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習			
	3	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習			
	4	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習			
	5	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習			
	6	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習			
	7	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストとは			
	8	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、統合と解釈について 検査演習			
	9	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、統合と解釈について 検査演習			
	10	失語症の評価	TLPA・重度失語症検査			
	11	失語症の評価	SALA失語症検査			
	12	失語症の評価	SALA失語症検査			
	13	失語症の評価	SALA失語症検査			
	14	失語症の評価	SALA失語症検査			
15	失語症の評価	症例、統合と解釈				

授業科目 (科目ID)	高次脳機能障害Ⅱ		担当教員  (実務経験)	教員 貴代美 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内の病院で34年以上言語聴覚士として勤務	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30時間
授業目的	様々な高次脳機能障害に対する検査の種類・特徴・実施方法について学ぶ。				
到達目標	対象者に適切な検査を選択・実施し、検査結果ならびに症状の観察から問題点を抽出できる。				
テキスト・ 参考図書等	(教)高次脳機能障害ポケットマニュアル 著者名:原寛美 発行所:医歯薬出版 (教)高次脳機能障害学 著者名:藤田郁代 発行所:医学書院 (参)高次脳機能障害学 著者名:石合純夫 発行所:医歯薬出版				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験、提出物を総合的に評価を行う。		
	レポート	0%			
	小テスト	%			
	提出物	20%			
	その他	%			
履修上の 留意事項	検査は自分たちで実際に体験すること。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害評価	評価における注意点、何を評価するのか、どのような検査を選択するのかを外観する。		
	2	知能検査	成人分野で使われる知能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	3	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	4	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	5	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	6	失認検査	失認に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	7	失行検査	失行に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	8	遂行機能検査	遂行機能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	9	注意機能検査	注意機能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	10	前頭葉検査	前頭葉に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	11	無視検査	半側空間無視と半盲の検査の特徴、実施方法について学ぶ		
	12	認知症検査	認知症検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	13	認知症検査	認知症検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	14	事例検討	いろいろな事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。		
15	事例検討	いろいろな事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。			

授業科目 (科目ID)	高次脳機能障害Ⅲ		担当教員  (実務経験)	教 貴代美  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内の病院で34年以上言語聴覚士として勤務	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位 時間数 30時間
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	30時間
授業目的	数ある高次脳機能障害検査の中から対象者に適切な検査を実施し、結果の統合解釈、問題点の抽出を行い、リハビリ方法について学ぶ				
到達目標	目標設定を行い、リハビリテーションプログラムを作成し訓練ができるようになる。報告書が作成できるようになる。				
テキスト・参考図書等	(教)高次脳機能障害ポケットマニュアル 著者名:原寛美 発行所:医歯薬出版 (教)高次脳機能障害学 著者名:藤田郁代 発行所:医学書院 (参)高次脳機能障害学 著者名:石合純夫 発行所:医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験、提出物を総合的に評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	%			
	提出物	20%			
	その他	%			
履修上の留意事項	検査は自分たちで実際に体験し、慣れておくこと。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害の復習	用語と検査の復習		
	2	知能検査	成人分野の知能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	3	記憶検査	記憶検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	4	記憶検査	記憶検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	5	注意機能検査	注意機能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	6	遂行機能検査	遂行機能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	7	無視検査	半側空間無視・半盲の検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	8	失認検査	失認検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	9	失行検査	失行検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	10	認知症検査	認知症検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	11	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	12	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	13	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	14	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
15	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。			

授業科目 (科目ID)	言語発達障害Ⅲ	担当教員  (実務経験)	佐々木 勇輝  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症について学ぶ。具体的な事例を基に評価・支援について考える。				
到達目標	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症の概要・評価・支援について理解する。				
テキスト・ 参考図書等	(教)標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 著者名:藤田郁代 発行所:医学書院				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験・小テストを合わせて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	20%			
	提出物	%			
その他	%				
履修上の 留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	自閉スペクトラム症について	定義・歴史・基本的概念		
	2	自閉スペクトラム症について	診断基準(DSM-5)・言語発達等の特徴		
	3	自閉スペクトラム症について	他の障害との関係、有病率		
	4	自閉スペクトラム症について	認知特性について(心の理論・中枢性統合・実行機能)		
	5	自閉スペクトラム症について	DVD(レインマン)鑑賞		
	6	自閉スペクトラム症児の評価	記録の仕方、情報収集		
	7	自閉スペクトラム症児の評価	評価(診断検査・スクリーニング検査・関連検査)		
	8	自閉スペクトラム症に対する訓練	支援の原則、TEACCHプログラム等		
	9	自閉スペクトラム症に対する訓練	支援法		
	10	注意欠如多動症について	定義・歴史・基本的概念		
	11	注意欠如多動症について	診断基準(DSM-5)・治療法など		
	12	注意欠如多動症について	評価(ADHD-RS,Conners3等)		
	13	注意欠如多動症について	SST、ペアレントトレーニング		
	14	注意欠如多動症について	家族支援、児童福祉法、発達障害者支援法の理解		
15	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症	国家試験問題を解く			

授業科目 (科目ID)	言語発達障害IV		担当教員  (実務経験)	佐々木 勇輝  有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年勤務。		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	発達障害について全般的に学び、支援の枠組みについて考える。					
到達目標	① 特異的言語発達障害および、学習障害の概要を理解する。 ② 検査の目的を学ぶ。 ③ 発達障害の支援方法を考える。					
テキスト・ 参考図書等	(教)標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 著者名:藤田 郁代 発行所:医学書院					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験・小テストを合わせて評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席せず、予習復習をすること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	特異的言語発達障害	特異的言語発達障害とは			
	2	特異的言語発達障害	言語・コミュニケーションの特徴			
	3	特異的言語発達障害	評価と支援			
	4	限局性学習症	限局性学習症とは			
	5	限局性学習症	限局性学習症のタイプ			
	6	限局性学習症	読み書きに発達			
	7	限局性学習症	ディスレクシア			
	8	限局性学習症	算数障害			
	9	限局性学習症	評価(STRAW-R、URAWSS等)			
	10	限局性学習症	支援(基本原則)			
	11	限局性学習症	支援(ひらがな、漢字の音読・書字訓練)			
	12	限局性学習症	事例演習			
	13	検査演習	言語検査等について保育園で実習を行う			
	14	検査演習	言語検査等について保育園で実習を行う			
15	限局性学習症	国家試験問題を解く				